

## あとがき

本書は序論で記したように同志社大学人文科学研究所に設置した「戦後日本思想の総合的研究」(代表者…出原政雄)という研究プロジェクトの成果論文集である。この研究会は、敗戦から七〇年近く経過するにもかかわらず、「思想史としての戦後研究」がまだまだ発展途上の分野であることから、あえてチャレンジしてみようと志して発足させた。三年の研究期間(二〇一〇年四月～二〇一三年三月)は文字通り試行錯誤の繰り返しであったが、研究会メンバーの精力的な尽力だけでなく、刺激的な報告によって豊富な話題提供をしていただいた多くのゲスト・スピーカー(飯田泰三、酒井哲哉、水溜真由美、稲葉伸道、福岡良明、吉次公介、河西秀哉、寺島俊穂、山本昭宏、木村智哉の諸先生)の協力もあって、ようやく成果論文集を上梓できるにいたった。ここに記して改めて感謝申し上げたい。

二〇一二年九月二二日には研究プロジェクトの成果報告として、同志社大学人文科学研究所主催の第七七回公開講演会が開催されたことが思いだされる。「戦後日本における行動する知識人——私たちは何を学ぶことができるか——」というテーマのもとに、安田常雄氏には「鶴見俊輔と思想の科学研究会」、広川禎秀氏には「恒藤恭と平和問題談話会——時代の傍観を拒否した法哲学者——」と題して講演していただき、編者(出原政雄)は「湯川秀樹と坂田昌一——原子力問題をめぐって——」について問題提起をした(講演記録は人文研ブックレットNo.42(二〇一三年一月)に収録されている)。この講演テーマに強調されているように、激動する現代日本において「行動する知識人」の復権を呼びかけることは本論文集刊行のひそかな願いでもある。

今回の企画は、戦後日本思想を読み解くにあたって、第一に戦前・戦中と戦後における断絶と継続という問題、第二に主として一九五〇年代の思想動向に注目したことは序論でも強調したところである。最近の集団的自衛権容認の閣議決定や特定秘密保護法の制定などによって戦後民主主義の行く末が問い直されようとしているとき、かつて平和や人権や民主主義といった戦後の価値の確立に熱き想いをもって議論していた激動の時代を改めて振り返ってみることは今こそ必要不可欠な試みであると思っっている。

本書に多くの力のこもった論文を寄せてくださったことに感謝しつつも、残念ながら予定していた論文が掲載できなくなったりして、全体の構想にやや不揃いが生じたことに編者の力不足を感じる。本書の完成に向けて大きな節目となった集中研究会（二〇一三年八月三日）を含めほぼ全員の報告を受けて基本的な編集方針の共有化をはかったが、序論で述べた「戦後日本思想」の捉え方や「知識人の役割」への想い入れなどは編者の考えでまとめたものである。今から振り返れば、むしろ「戦後知識人」として取り上げるべき人物は数多く残されているし、また国内の思想動向としては反体制や左翼の思想が手薄になり、あるいは「冷戦としての戦後」（C・グラック）を取りあげる研究、つまり世界やアジアの中で戦後日本思想を考える研究がもっとあってもよかつたかもしれない。現在は継続研究会（戦後日本思想の諸相）二〇一三年四月～二〇一六年三月）を設置して取り組んでいる最中であり、できうれば第二の成果論文集を刊行することによって残された課題を補充できればと希望している。

そして「戦後」はこれまで、あまりにも「戦後」を担った世代によって論じられてきた。……いまこそ、「戦後日本」を歴史化する試みが必要であろう」（岩崎稔ほか編『戦後日本スタディーズ①40・50年代』紀伊国屋書店、二〇〇九年）と呼びかけられた提案に応えうることを願い、多くの若手研究者に本研究会に参加してもらったが、その結果として本書に彼らの意欲的な論文を数多く収集することができたこと、また若手メンバーの中から、根津朝彦『戦

後『中央公論』と「風流夢譚」事件——「論壇」・編集者の思想史——』（日本経済評論社、二〇一三年）や櫻澤誠『沖縄の復帰運動と保革対立——沖縄地域社会の変容——』（有志舎、二〇一二年）、平野敬和『丸山眞男と橋川文三——「戦後思想」への問い——』（教育評論社、二〇一四年）といったすぐれた著作が刊行されるにいたったことは大変喜ばしいかぎりである。

本書は同志社大学人文科学研究所から二〇一四年度刊行助成金を与えられ、人文科学研究所研究叢書の一つに加えられたものであり、ここに記して感謝の意を表したい。

また本書の刊行にあたって、同志社大学人文科学研究所事務室の皆様、および法律文化社の舟木和久氏には大変お世話になり、ここより御礼申し上げます。

二〇一四年二月

編者 出原政雄